

【図表の見方】

解説資料に掲載している図表は、火山活動の状況をより分かり易くするためのものですが、グラフを見るうえで以下のような点に注意してください。

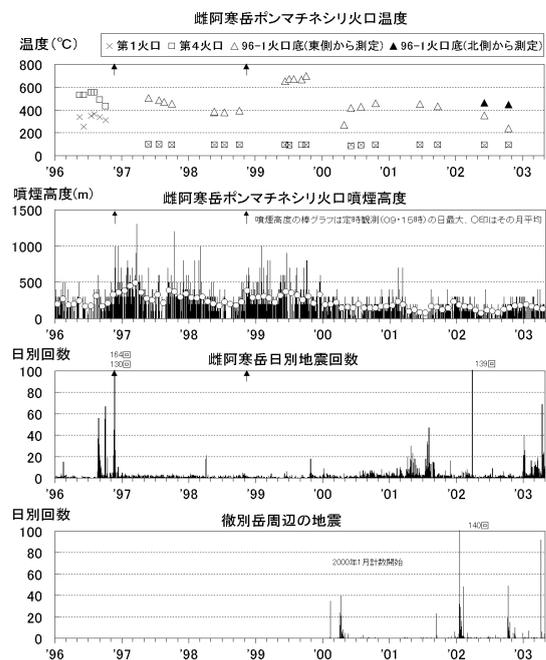
火山活動経過図（日別・月別）

日別のグラフは最近5～6年、月別は最近30年程度までさかのぼり、火口温度、噴煙高度、地震回数など複数のグラフを時系列に並べています。過去にさかのぼり多種目のグラフを並べて見ることで、火山活動の状況を総合的に判断することができます。

(1) 温度グラフ

火口は火山の地下の活動を見る窓であり、火口温度は地下からもたらされる重要な情報の1つです。火山で測定する温度には、温度計の感部を噴気孔や地熱域に直接差し込んで測定（直接測定）した値と、離れた場所から赤外放射温度計や赤外熱映像装置で測定（遠隔測定）した値の2種類あります。通常、注釈なしに温度の値を記載している場合は直接測定を意味します。遠隔測定は、測定距離や日射、湿度などの条件で値が変わりますが、いつも同じ場所から同じ条件で測定できれば、温度が上がったか下がったかの傾向をつかむことができます。グラフでは測定場所や、直接・遠隔測定の違いによりシンボルを変えるなどして値を区別しています。

また、表面温度分布を面的に表現する赤外熱映像は、地上からの測定だけでなくヘリコプターなどからの測定も可能なため、監視の目が届きにくい火山の活動把握に有効ですが、日射の影響を大きく受けるためその見極めが重要です。



火山活動経過図の例

(2) 噴煙高度グラフ

火口から立ち上る噴煙の高さは、火口の熱活動を知る手がかりになります。グラフには定時観測（通常09時と15時）の噴煙高度のうち高い値を表示しています。噴煙の見かけの高さは、風や、湿度など気象の影響を大きく受けます。噴煙活動の盛衰を見るために月の平均値も併せて記載していますが、それでも冬期間には噴煙が多く見えるといった季節変動が含まれています。

(3) 地震回数グラフ

ある一定の基準（振幅など）を火山毎に定め、基準に達した地震回数を数えています。最近の雌阿寒岳や樽前山のように地震活動が活発な火山と、駒ヶ岳のように活発でない火山がありますが、長年の回数グラフを見ることで、その火山の平常時の地震回数を把握することができます。地震が増加した場合には、過去の増加時と比較して現状を判断するとともに活動の推移を見極めます。有珠山のように必ず噴火の前に地震が増加する火山は稀ですので、地震活動だけでなく噴煙や地殻変動の状況とあわせて見る必要があります。